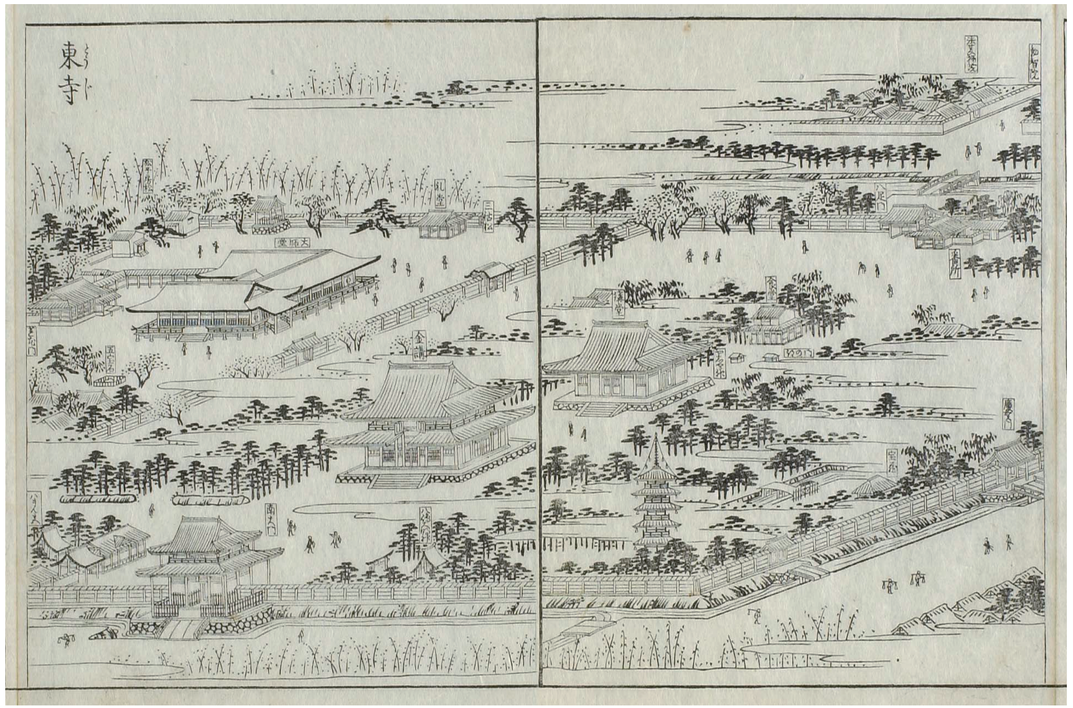
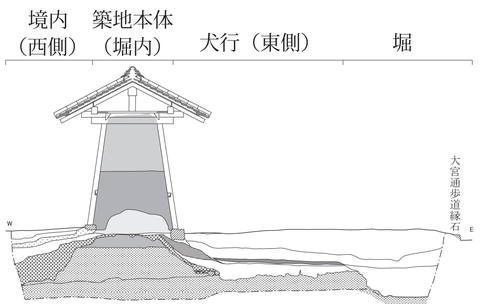
史跡教王護国寺（東寺）境内　東堀跡



『都名所図会』（安永九年：1780 年）



トレンチ断面模式図

1 トレンチ断面画像

教王護国寺（東寺）は、平安京遷都にさいして国家鎮護の寺院として建立されました。弘仁十四年（823 年）に弘法大師空海に給預され、伽藍の造営が本格化しました。伽藍の四方は築地で囲まれており、この東面の築地は、平安時代の長保二年（1000 年）に修理された記録が残ります。以後も文禄五年（1596 年）の大地震で崩壊するなど、度々被害を受けましたが、修理が重ねられ現在に至っています。

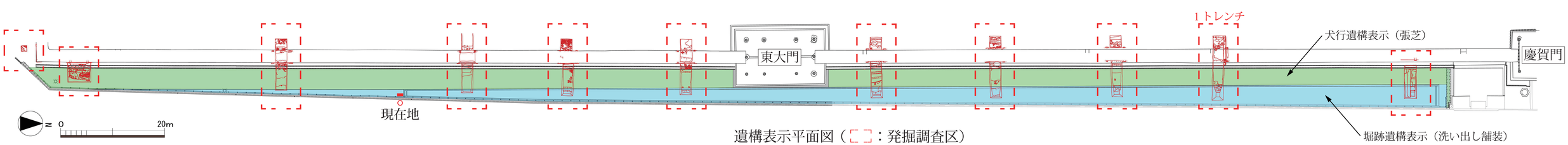
東寺では、平成二十二年（2010 年）から令和五年（2023 年）にかけて、築地の解体修理を行いました。これに伴い実施した発掘調査では、東面の築地に沿った南北方向の堀跡や礫敷きの犬行を確認しました。伽藍を築地で囲う東寺は、鎌倉時代から室町時代にかけて度々戦場となり、室町時代には防御のため四周に堀を築いていたことがわかっています。見つかった堀は、この時に作られた東堀と考えられます（南堀と北堀は一部現存）。この様子は、江戸時代の京都の名所を紹介した『都名所図会』（安永九年（1780 年）刊）にも描かれています。

水を湛えていた東堀の規模は大きく、幅は 2.3m以上もあり、東岸は大宮通の下にまで及んでいました。深さは 0.6 ～ 0.9m以上あり、何度も掘り直しが行われ維持されていたことがわかりました。堀は明治時代までその痕跡を留め、大宮通の拡幅工事によって埋められました。

堀跡の遺構は、東寺の長い歴史の中で戦乱の時代の名残を伝えるものとして重要であることから、文化庁や京都府、京都市、学識経験者等の関係機関の指導のもと、東堀の整備を行うことになりました。

遺構は埋め戻して地下に保存した上で、東堀の一部（長さ約 250m）を意匠的に表現しています。堀跡は見つかった位置を踏襲し、遺構保護のために水深を浅くし、洗い出し舗装によって、水を緩やかに流す工夫をしています。堀と東面築地の間の犬行跡は芝を張って表現し、修理を終えた築地との調和を図っています。

令和５年３月　教王護国寺



遺構表示平面図（⌈ ⌉：発掘調査区）